

研究室から

【山形県立博物館】

山形県立博物館 主幹

佐々木 洋治



縄文びとは

太陽の位置と、月の満欠、風、雲の流れに季節の移ろいを肌で感じ、山川草木と話しをする術を知っている。

花が咲き、チヨウチヨが乱舞する春

山ブドウ、トチ、クリなどの果実が豊富な

秋

川にサケ、マス、戻り、白鳥が飛来する頃

寒く心に温もりのある。

風雪の冬がやってくることも知っている

ひとびとは、囲炉火を囲み、肩を寄せあい

家族や遠い遠い友人の話しを

繰返し繰返し語りながら

きつとくる春に希望を抱き

輪廻転生の世界に生きつつける。

南北五〇〇キロのネットワーク

平成七年（一九九五）六月二十三、二十四日の両日、遊佐町で日本海沿岸東北自動車道

の早期実現を目指して「第八回日本海夕陽ラインネットワーク・イン・鳥海」が「いにしえの道よりあすなるへ」をキャッチフレーズに、主催日本海夕陽ラインネットワーク協議会、主管鳥海青年会議所により開催された。時に、青森市三内丸山遺跡及び山形県内の縄文時代の遺跡から新潟県糸魚川周辺産のヒスイ製の大珠や勾玉・管玉などが発見されていることから、南北五〇〇キロのネットワーク「古代の交流から現代の交流へ」と題する講演をさせていただいた。冒頭の散文詩はその時に紹介したもので、私が平成四年（一九九二）舟形町西ノ前遺跡の発掘調査時、発見された

縄文文化は北の文化

土偶から心を感じたままの気持ちを表現したものである。

現在、山形県立博物館において、平成十一年度の企画展「やまがたの土偶 縄文の女神たち」を開催している。期日は四月二十四、六月二十七日の約二カ月間である。展示の内容は、縄文時代の精神文化を代表する県内より発見された七百十五点の土偶を時期別、地域別ごとに展示し、その変遷がひと目でわかるようになった。おそらく、今回展示できなかつた土偶、チェックできなかつた土偶を含めると、推定であるが少なく見ても約八百点はあるであろう。

土偶は縄文人の精神

土偶とは一般に縄文時代（今から一二〇〇〇～二〇〇〇年）に人の形につくられた土製品をいう。土偶は縄文時代の人々の代表的な道具の一つであり、従って大抵の縄文時代の遺跡からは遺物として発見されることが多い。しかし石斧・ヤジリ・石皿などの石器や、煮沸・貯蔵などに使われる大小さまざまな土器などは、直接生活に結びつくものであることから「第一の道具」、土偶など直接衣食住に結びつかない精神的あるいは宗教的道具などは「第二の道具」と研究方法手段として区別される場合がある。

日本列島における土偶出土の分布は、沖縄県を除く全域にわたり、その数は現在約一万五千点が確認されている。また東日本に多く西日本には少ないことも分かっている。

土偶のほとんどは、頭部、胴部、手部、脚部といった一部の残欠のものが圧倒的に多く、復元されるものは少ない。ましてや完全なものなど極めて希である。形も十字形、コケシ形、出尻形、ハート型、筒形、山形、みみずく形、遮光器土偶、と千差万別であり、姿も立像、座像、うずくまる、懸垂といったようにさまざまである。大きさは十センチ〜十五センチが平均で、三十センチを超えるものは非常に少ない。土偶の製作技法も古くは中実で、縄文時代晩期になると中空のものが多くなる。いわゆる青森県亀ヶ岡の遮光器土偶はあまりにも有名である。

人形の土偶は、妊娠、乳房、お尻などが特に強調され、全体に豊富な表情のものが多く。土偶のほとんどがその割れ口から故意に壊さ



舟形町西ノ前遺跡の土偶

れた状態で発見、または出土することから一般的には出産や豊饒を願ったり祈ったり、病氣・ケガなど身代わりとした呪具と考えられている。舟形町西ノ前遺跡から発見された土偶は高さ四十五センチと日本の土偶の中で現在一番大きく、しかも欠損部がほとんどなく完全に復元された我国縄文文化「第二の道具」を代表する土偶である。

このことから、平成八年（一九九六）七月に山形県指定有形文化財に指定される。翌々年の平成十年（一九九八）十月、縄文時代の土偶としては現在最大（高さ）を誇り、かつ造形的に人の姿を究極なまでにデフォルメし、造形として完成した美しさを感じさせるものであり、長野県棚畑遺跡出土の土偶（国宝）と並びひとつの土偶造形の到達点を示す逸品である。また、西ノ前遺跡から本土偶の地に四十七点の土偶残欠が出土している。造形的には本土偶と同様のものであるが、完形

に復元された箇体はなく、意図的に埋納などの行為を行ったものはないが、同一遺跡における集落存続の期間中に作られたと考えられることから、他の残欠も含めて国重要文化財に指定された。

この造形的に完成された美的フォルムに對峙し、ひとびとは具体的には私たちは「ヴィーナス」あるいは「地母神」あるいは「女神」と呼んでおり、またそのように表現している。

ヴィーナスとはローマ神話で「豊饒 豊かさ」を司る女神の名を言うのであり、そのルーツはオリエントで信仰されていた地母神（グレート・マザー）信仰にまでつながると考えられる。

一万年前、人類は自然環境の変化から今までの狩猟採集生活から麦などの穀物を栽培し、しかも羊や山羊を飼育する農耕、遊牧生活が西アジアで始まる。このまったく新しい

生活、くらしの変革は、採集経済から生産経済への移行期であり、未経験の業は生死にかかわることから祈りの精神が常に生活の基盤をなしたと考えられる。穀物の豊作、羊、山羊などの家畜の繁殖は家族や一族の願いであり、大地の命、地母神信仰が芽ばえる。種を蒔き、そして力強く育つ精、その結晶である実りと収穫の喜びは、子を生む母に重なり、その思いは万物の母となっていく。

二十一世紀は多文化の世界

新石器時代農耕社会のメソポタミアやアナトリアなどでは、豊満な裸

体の土偶が大量に出土している。それらは女性的特徴を誇張することで豊穰を目に見える形にしたのが地母神像であろう。

世界史の牛の土偶は、新石器時代農耕社会の豊穰を祈る神である。日本の土偶は縄文時代の所産であり、その生活手段は、発掘調査の結果狩猟採集の経済が定説である。むしろ稲作を生業とする弥生時代に大量の土偶が発見されるが、ヨーロッパとの懸合性がでくるのであるが、目下のところ土偶の出土は古い時期に少し見られるが皆無にひとしい。

近年、女性的特徴を誇張した偶像、特に新石器時代の偶像全てを地母神あるいはヴィーナスと呼称しているが、その基層は出土状況や場所、社会の構成そして宗教観など総合的な検討が今後必要であろう。いわゆる地域の時代そこに栄えた大小の文化、お互いを認める多文化の社会こそ二十一世紀に求められる方向ではないだろうか。

それにして西ノ前遺跡出土の土偶はこれまでの土偶のイメージを変えた。その究極なまでのデフォルメされた造形は豊かな感性の心の表現にほかならない。このことは古今東西等しく人々に深い感銘を与えた。

一九九八年九月末日から約二ヶ月間フランスのパリにある日本文化会館で縄文文化を紹介する展覧会が開催された。文化庁・国際交流基金の主催によるもので欧州で初めて開かれた。特に日本通で知られるシラク大統領、世界的な文化人類学者レヴィ・ストロース氏らが訪れ、シラク大統領は予定を四十五分もオーバー、「山形のヴィーナスは、本当にすばらしい。」と感想を述べている。四十五センチと小さいが山形には世界に誇れる大きな文化財がある。